



Data

監督・脚本: ハイメ・ロサレス
出演: バルバラ・レニー/アレック
ス・ブレンデミュール/ジョ
アン・ボテイ/マリサ・パレ
デス/ベトラ・マルティネス
/カルメ・ブラ/オリオル・
プラ/チェマ・デル・バルコ

👁️👁️ みどころ

スペインのカタルーニャ地方は有名だが、カンヌ常連のスペインの気鋭監督ハイメ・ロサレスの作品を観るのは本作がはじめて！

私の父親は誰？それが明かされないまま母親を失ったペトラは、ジャウメ邸に滞在してアレコレと……。全7章の物語をあえて時系列をずらして展開させる手法は斬新。しっかり集中していなければ、ストーリー展開についていけなくなるので、細心の注意が必要だ。

人間は嘘をつく動物。それは昔からの常識だが、本作に見る自殺や殺人の原因がその嘘に由来するものだとしたら、その罪は誰が背負うの？一方で、結婚、出産という幸せな展開を見せながら、他方でギリシャ悲劇のようなあっと驚く展開を見せる本作は、特に後半に注目！しかして、本作ラストの穏やかな幕切れを、あなたはどうか解釈？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■スペインのハイメ・ロサレス監督作品にはじめて注目！■□■

1970年にスペインのバルセロナで生まれたハイメ・ロサレス監督は、長編6作のうち5作品がカンヌ国際映画祭に選出された気鋭の映画作家。しかし、私は同監督作品をこれまで観たことがなく、本作がはじめてだ。原題を『ペトラ』、邦題を『ペトラは静かに対峙する』とする本作は、若い女流画家ペトラ（バルバラ・レニー）の父親探しのストーリーの中で、「ギリシャ悲劇」のような濃密な人間ドラマが展開していくかなり興味深いもの。タイトルになっている女性ペトラを演じるのは、『マジカル・ガール』（14年）で主演したバルバラ・レニーだが、同作も私の評価は星3つだった（『シネマ38』未掲載）。しかして、

私は本作ではじめてスペインのハイメ・ロサレス監督作品に注目することに。

本作の舞台は、スペインのカタルーニャ地方。そこにある著名な彫刻家ジャウメの邸宅はだだっ広いうえ、狩場もあるようだから、すごい。物語後半では、ペトラは結婚して田舎の小さな町に住むことになるが、その田舎の風景も美しく快適そうだ。日本ではこんな風景は北海道か軽井沢くらいしかないのでは？本作では、「父親探し」というメインテーマの中で、意外にも次々と自殺事件や殺人事件も起きる濃密な人間ドラマに注目しつつ、それと対比するかのような、カタルーニャ地方の美しい風景にも注目したい。

■□■はじめは第2章から！それはなぜ？■□■

映画は、古代モノからSFモノまでいつの時代を描くこともできるし、どの世界を描くことも自由。さらに、複数の時代を同時並行的に描くことも可能だ。すると、物語だって第1章から順番に進める必要はなく、第2章から始め、途中で第1章を見せた方が面白いかも・・・？そして、その方が観客自身に自分の頭で物語のあり方の「なぜ？」を考えさせることになるのでは？そう考えたハイメ・ロサレス監督は、第1章から第7章までに分け、そのそれぞれにタイトルをつけた本作を、第2章「ペトラ ジャウメの世界に出会う」からスタートさせるので、それに注目！

本作のパンフレットには、「director profile」の他、「director's note」と「director's interview」があり、そこでは本作についてのハイメ・ロサレス監督のさまざまな思いが語られている。そこで注目すべきは、第1に、世界的に知られる女優マリサ・パレデスと、ジョアン・ボテイのような生まれながらの俳優を組み合わせたこと。つまり、本作の「表の主人公」はヒロインのペトラだが、「裏の主人公」は、一方では著名な彫刻家という成功者でありながら、他方では権力をカサに着た何とも冷酷でイヤな人間であるジャウメを演じたジョアン・ボテイが、77歳にしてはじめて演技をしたズブの素人ということだ。冒頭の第2章「ペトラ ジャウメの世界に出会う」に登場するジャウメは、ジャウメ家の主としてそれなりの貫録を持った成功者の顔だが、物語が進んでいく中でこの男が少しずつ見せていく正体とは・・・？

第2の注目点は、時系列を前後させた構成についてのハイメ監督の狙い。それはかなり困難な構想であり、困難な作業だったようだが、その成否はあなたの目でしっかりと！

■□■父と息子の確執はどこから？家政婦の自殺は？■□■

冒頭の第2章「ペトラ ジャウメの世界に出会う」では、ジャウメ家を訪れたペトラ（バルバラ・レニー）がジャウメの妻マリサ（マリサ・パレデス）の料理に舌鼓を打ったり、家政婦のテレサ（カルメ・プラ）とその息子パウ（オリオル・プラ）を紹介される中で、しばらくジャウメ家に滞在する姿が描かれる。また、ペトラは画家としての創作活動のかたわら、ジャウメの息子で写真家のルカス（アレックス・ブレンデミュール）に連れられ

て狩りに出かける中で、互いに好意をもっていく姿が描かれる。しかし、ペトラがここにやって来た目的は、自分の父親探しのため。そして、ペトラはジャウメこそが自分の父親のはずだと考えていたから、ルカスとあまり親しくなるのは異母兄妹(?)としてマズい。そう考えていたらしい。そのため、ルカスとの関係は、当然一線を越えないものに。他方、2人の会話を聞いていると、父親ジャウメと息子ルカスは「父子の確執」が顕著だが、その原因は？

そして、第3章「テレサの自殺」では、テレサが謎の自殺を遂げるが、そこでは、あつと驚くジャウメの悪の本性が露呈されるので、それに注目！

■□■なぜ父親の名を告げないの？ジャウメの答えは？■□■

ハイメ・ロサレス監督の狙い通り、スクリーン上で第2章「ペトラ ジャウメの世界に会う」、第3章「テレサの自殺」の物語が流れていく中で、「論点」と“不穏な雰囲気”は十分わかってくる。しかし、何となく落ち着きが悪いから、お尻がモゾモゾ・・・？もっとも、第1章「ペトラの母親の病と死」で、死期が迫った母親フリア（ペトラ・マルティネス）の世話をしながら暮らしているペトラの姿を見ると、ペトラは死ぬまでにはフリアから父親の名が告げられるだろうと期待していることがわかる。それをなかなか切り出せないペトラを見ていたおぼが、ある日助け船を出してくれたため、ペトラは思い切って「私の父親は誰？」と質問したが、フリアはあくまでその回答を拒否したまま亡くなってしまうことに。そこまで頑なに父親の名前を娘に明かすのを拒否するのは一体なぜ？それが本作最大のテーマだが、叔母が古いツテを辿って調べてくれたところによると、父親はどうもカタルーニャ地方に住んでいるジャウメではないかということに突き当たったから、ペトラは・・・？

なるほど、これで「第2章」「第3章」と続いていた導入部の問題は解決。しかし、第4章「ジャウメ ペトラに父親ではないと告げる」では、ペトラの絵を見て「自己セラピーのための絵だ」等と酷評するジャウメに対して、ペトラはついに自分が何のためにジャウメの屋敷にやって来たのかを明かし、「なぜ来たと思う？あなたが父親だからよ」と問い詰めることに。ペトラにしてみれば、“状況証拠”をしっかりと握ったうえで追及だったが、ジャウメは意外にも「自分は父親ではない」と否定したうえ、「なぜなら・・・」と明確な説明をしたから、アレレ・・・。ここまでのストーリーはこれでよくわかったが、これからストーリーはどのように展開していくのだろうか？

■□■一転して「お前は自分の娘だ！」と告白！それはなぜ？■□■

ハイメ・ロサレス監督は「director's note」の中で、『ペトラは静かに対峙する』には複数のテーマがある。見る者それぞれが自分でテーマを定義するだろう。しかし、アイデンティティは大切である。運命と、善悪の戦いも同じく。プロット全体に悲劇の静脈が流

れている。もし私が『ペトラは静かに対峙する』の主題を要約するとしたら、本作は探求と贖罪についての映画であると言うだろう。」と述べている。たしかに、その通りだ。

本作前半にあたる「第2章」「第3章」「第1章」「第4章」を見れば、本作の基本的なストーリーは一見完結したように見える。しかし、それはあくまで事実関係の羅列だから、前半だけでは本作はどんなテーマについてどんな主張をしたいのかは全く見えてこない。第4章までは、父親探しに失敗してしまった、ことで物語が終わってしまうことになるから、本作の観客は必然的に後半の第6章「ジャウメの嘘と その結末」、第5章「ペトラとルカスの愛の始まり」、第7章「ペトラと娘フリアの新生活」での「種明かし(?)」に興味と関心を集めることになる。つまり、観客はまんまとハイメ・ロサレス監督の狙い(戦略)にハマってしまうわけだ。

しかして、第6章では「ジャウメの嘘と その結末」と題されている通り、ジャウメがペトラに対して「お前は本当は自分の娘だ」と打ち明ける展開になるが、それはいつ、どこで?また、その時のペトラの生活はどうなっているの?さらに、なぜジャウメはそんな時期になって、物的証拠を示しながらペトラに真実(?)を打ち明けたの?また、なぜあの時、ペトラの質問にジャウメはあえてウソをついたの?

■□■結婚、出産はめでたいが、自殺や殺人は?■□■

冒頭の第2章「ペトラ ジャウメの世界に出会う」で見せたペトラとルカスの仲の良さや相性を見ていると、この2人がそのまま結婚に至っても何の不思議もない。しかし、2人は異母兄妹ではないかと疑っているペトラが、2人の仲に一線を設けたのは当然だ。他方、ジャウメの説明を聞けば、それに納得せざるを得なかったため、ペトラは当然ジャウメの屋敷を出て行ったが、その後ペトラとルカスの交際は?そう考えると、この2人が結婚したこと、また、2人の間に子供が生まれたのも当然だと納得できる。そのため、第5章「ペトラとルカスの愛の始まり」では、絵をやめて田舎に引っ越した2人が幸せな結婚生活を続けている様子が描かれる。もっとも、それは2人が異母兄妹でないことが大前提で、もしペトラがジャウメの娘だとしたら、2人の結婚と一人娘フリアの出産はヤバイ。誰もがそう思うのは当然だ。意地の悪いジャウメが、ある日わざわざ2人の家を訪れ、そんな「真相」を語ったことによってペトラは大きく傷ついたが、さて、ルカスの方は?

他方、第3章では、ジャウメ家の家政婦であるテレサの自殺とその原因が赤裸々に描かれたが、テレサと使用人ファンホ(チェマ・デル・バルコ)との間の一人息子パウ(オリオル・ブラ)を巡る物語も興味深い。絶対権力者であるジャウメは、パウの無能さを知りバカにしていたが、ルカスから「パウに仕事を世話して欲しい」と頼まれるとそれに応じていたから、意外に良いご主人?そう思っていると、何のことはない。ジャウメは「人生はギブアンドテイクだ」とのたまって、パウの母親テレサに肉体関係を迫っていたのだから、ひどい。もちろん、パウにはそれは内緒だったが、もしパウがそんな母親のことを知

ったら・・・？そんな不安が広がる中、第7章「ペトラと娘フリアの新生活」では、パウが意外にもジャウメの助手としていい働きをしている姿が描かれるから、こりゃ予想外。ところが、そう思っていると・・・？本作は、一方では結婚、出産というめでたい状況も紹介されるが、他方では自殺や殺人事件が相次ぐので、それに注目！

■□■最後のあっと驚く真相とは？やっぱり女の方がうわて？■□■

第7章「ペトラと娘フリアの新生活」では、前述のパウに関する物語が描かれるが、それはあくまでサブの物語。そこでのメインは「ペトラと娘フリアの新生活」の中にジャウメの妻マリサが再び登場し、孫のフリアに会いたいと申し出る物語と、それに絡んだ最後の「あっと驚く真相」の物語になる。本作は、ハイメ・ロサレス監督の狙い通り、複雑なテーマと人間関係を、あえて時系列を入れ替えて描いていくから、よほどの集中力を持ってスクリーンを覗いていなければワケがわからなくなってしまう。しかし、逆に集中して鑑賞していれば、「これもなるほど」、「あれもなるほど」、と納得できるテーマとストーリー展開だから素晴らしい。

しかして、第7章で、マリサがペトラのもとを訪れたのは、既にルカスが自殺してペトラが幼いフリアと2人で生活していた時。ペトラはそこで「孫に会いたい」と懇願するマリサの願いを断固拒否したが、それは一体なぜ？また、そこでマリサが打ち明けた最後の“あっと驚く真相”とは？それは、夫ジャウメとの間に生まれた子供だということでは何の疑いも持たれていなかったルカスが、何とマリサの一夜かぎりの行きずりの情事の結果生まれた子供だったという告白だったから、すごい。夫ジャウメにバレずにホントにそんなことができるの？私のみならずペトラもそう考え、そんな質問をしたが、それができるからやっぱり女の方がうわて・・・？

それはともかく、この時点でマリサからそんな真相(?)を聞かされたペトラの気持ちは如何に？観客はここであらためて本作全体のストーリーを整理しないと、頭がこんがらがっているはずだ。しかして、本作ラストに訪れるシーンは、ペトラがフリアをマリサに合わせる決心をし、彼女を連れてカタルーニャ地方の邸宅を再び訪れるものになるから、このラストの穏やかなシーンをしっかり味わいたい。

2019 (令和元) 年8月29日記